

## 編集後記

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 感染症に係るワクチン接種の準備が着実に進めば、今月中には優先接種対象者である私たち医療関係者への接種が開始されそうです。先行接種を受けた皆さんの副反応はいかがだったでしょうか。

論説と話題は、全国学校保健・学校医大会です。気になる発表の一つは、COVID-19に関するもので、我が県でも、昨年4月に感染した私立高等学校生徒や専門学校生に関する根拠ない情報が拡散したことを思い出しました。

もう一つは、一般児童における吸入アレルギー感作率の経年変化に関する発表で、スギ及びカモガヤの感作率が顕著に上昇しているそうです。花粉・食物アレルギー症候群 (PFAS) として最初に報告されたのは、北海道のリンゴ農家で自分が作ったリンゴを食べると口腔、咽頭、口唇粘膜の刺激感や掻痒感などのアレルギー症状を発症して食べられなくなった症例で、原因はシラカンバの花粉に感作されたことでした。現在では、複数の花粉アレルギーと果物に含まれる蛋白質との交差感作が判明し、PFASという疾患概念が提唱されています。スギ花粉はトマト、カモガヤはウリ科のメロン、スイカ、キウイなどと交差感作があるので、スギやカモガヤに感作されてPFASを発症する児童の増加が懸念されます。

学術は、鹿児島医療センターの谷口 歩先生から「当院における頸部内頸動脈狭窄症に対する外科治療」と題して、頸部内頸動脈狭窄に対する頸動脈内膜剥離術と頸動脈ステント留置術の使い分け方に関する報告と、国立国際医療研究センターエイズ治療・研究開発センターの照屋勝治先生によるCOVID-19流行下でのインフルエンザ治療に関する内科医会1月例会の講演サマリーです。この冬、COVID-19とインフルエンザが同時流行したら、鑑別診断や治療はど

のようにすれば良いのだろうと心配されていた先生も多かったと思います。幸い、インフルエンザで医療機関を受診したのは、全国で推定1.2万人と例年の0.1%程と極めて少ない現状です。しかし、備えあれば憂いなし、同時流行という最悪のシナリオを想定した診療に関する提言をご確認ください。

随筆・その他は、本コーナー常連の古庄弘典先生の切手が語る医学、武元良整先生の貧血に関するエッセイ、栗 博志先生の大作「歌と写真で綴る薩摩の脇道その3」以外に、公益社団法人昭和会の今給黎尚典先生がいまきいれ総合病院の移転について投稿されています。今回の移転で、私が区長をしている東区の会員数は438人、代議員数は来年度から南区の1.9倍の15人を選出する大所帯になりました。また、小田原良治先生は「裁判と法律学 - 『最高裁回顧録』補遺 (藤田宙靖著)」を読み返してみ、先生が尽力された医療事故調査制度、そして大好きな「鬼平犯科帳」に思いを馳せた話を書かれています。私も鬼平犯科帳は好きで全巻読破したことがありましたが、長谷川平蔵の「善事をおこないつつ、知らぬうちに悪事をやってのける。悪事をはたらきつつ、知らず識らず善事をたのしむ。これが人間だわさ」という言葉は深いです。リレー随筆は、鹿児島大学病院の徳重沙樹先生の「もっと知ってほしい！ジブリ作品の魅力！」と題したジブリ作品を色々な角度から楽しむ方法を紹介した楽しいエッセイです。

医療従事者の接種が終わると高齢者、基礎疾患を有する人へと接種対象は広がる予定ですが、全世界の需要と供給の状況を考えると供給の遅れが心配されます。解決策として国産COVID-19ワクチンが量産されればと思いますが、実用化の目処がたっているものはない現状は残念です。

(編集委員 島田 辰彦)